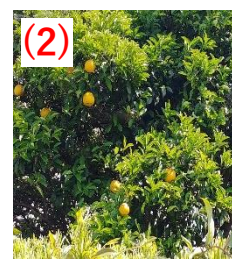




(1) 桑の実
(日本全国・中国等アジア系)



(2) 柚子
(東北～九州・中国)



(3) スイートピー
(日本・地中海地域)



(4) ソバの花
(特に北海道・中国)



(5) ビワ
(関東～九州・中国)



(6) トウモロコシ
(日本全国・米国)



(7) ウメ
(日本全国・東アジア)



(8) ブドウ
(北海道～四国・欧米)



(9) 冬柿
(日本全国・中国)



(10) 春柿
(日本全国・中国)

🍎…果樹

★…施設

植生図を用いて分析してみよう！

調査範囲である松原地区や新今別府、南新町には、上記のように数多くの植物が見受けられた。その中でも特に果樹が多く生息していたように思う。そこで実際に都農町松原地区に占める植生の種類について、環境省の植生調査データを用いて確認してみた(左図)。調査範囲は赤丸で囲まれた地図に示している。この図を見ると、調査地域には水田雑草群落、緑の多い住宅地、落葉果樹園、畑地雑草群落、踏跡群落・路傍雑草群落という5つの植生が存在していることが分かった(右図)。

今回班で制作した左上の地図にある、果樹のマークの場所と赤色の斜線で示された落葉果樹園を照らし合わせてみると、果樹のマークがあった場所のほとんどが落葉果樹園と示されたエリアと一致している。また、旧10号線付近は緑の多い住宅地と示されたエリアと一致しており、現在の国道10号線よりも自然が豊富な古くからの住宅街であることが分かる。このマップに多く見られる落葉果樹園や、畑地雑草群落、緑の多い住宅地と異なり、水田雑草群落や踏跡群落・路傍雑草群落が占めるエリアが少ない。農園の方々にインタビューをさせて頂いたとき、都農には名貫川という川があるが水位が低く、稲作をするための十分な水がなかったというお話を聞かせてもらった。だからこそ畑作や果樹栽培が発展し、マップに表されているように水田雑草群落のエリアが少なく、落葉果樹園や畑地雑草群落が広範囲を占める植生になったのだと推測できる。



出典：環境省自然環境局 生物多様性センター、植生自然度調査 植生調査, https://www.biodic.go.jp/kiso/vg/vg_kiso.html, 2023/06/14

松原大師堂・金刀比羅神社

この大師堂は100年ほどの歴史がある松原地区の所有物であり、四国から松原地区に移住してきたお坊さんによって作られた真言宗の仏堂である。建物の中には大師像が6体奉納されており、矢野という人が名貫川で1体目の像を拾ったことが始まりである。毎月21日に信者が集まって般若心経を読んでいる。また、コロナ前は春に子供相撲大会を開いたり、祭りで松原獅子を披露したりしていた。大師堂の入り口には道半ばで行き倒れた人々を弔った石碑があり、昭和55年に建てられた金刀比羅神社も隣接されている。神社の柱は老朽化によりぼろぼろになっている。さらに近年は掃除をする人も高齢化が進み、維持方法が課題となっている。



↑松原大師堂（外部）



↑松原大師堂（内部）



←金刀比羅神社



←石碑

旧10号線

10号線はかつて人口が多く、夏祭りで神輿が担がれることがあるほどにぎわっていた。しかし、近年は高齢化や人口減少が進み、店も閉店していった。訪問時営業していた店は、電気家具の店やたばこ屋や散髪屋しかなく、空き家が多かった。現在、旧10号沿いに住む人が「裏通り」と呼んでいる所に多くの人が住んでいる。また、近所づきあいもコロナに関係なく少ない。人々がつながる機会はグランドゴルフである。旧10号線沿いに見守り隊の車がいった。旧10号線を使って通学する子供達の安全を守るために見回り活動をしている。



↑旧10号線



↑見守り隊の車



←商店

まるみ観光果樹園

100年以上の間に三代にわたって経営されている農園で、梨とぶどうを栽培している。特に梨においてはグリーンジャンボという品種を育てている唯一の果樹園。観光果樹園の名の通り、6月末から10月の間は果物狩りや直売所が開かれる観光スポットになる。栽培は受粉から収穫までほぼ全ての手で行われており、工夫として麦飯石という石を砕いたものを土に混ぜることでミネラルが豊富な作物を作っている。ただ、観光地として人気を持つ一方、経営者を含めた従業員の高齢化と後継者の不在という問題を抱えており、数年後には閉園してしまう可能性もあるとか。余談だが、周囲にも果樹園が多く、昔はみかんなども生産されていたとか。これは都農町に流れる名貫川が低い位置にあるため水が得づらく、水を多く使う田には向かない土地だったためである。



↑看板



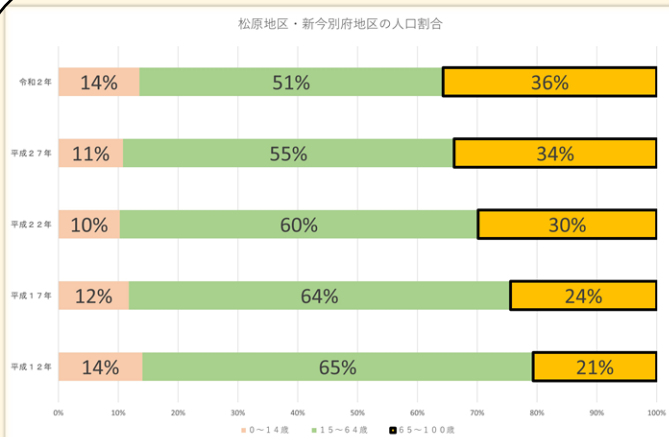
↑麦飯石



↑梨



↑葡萄



出典：総務省統計局

●実習を通して気付いた松原地区の課題について

都農町の松原地区を実際に探索したところ、『高齢化』が住民の話からも目に見えて問題になっていることが分かった。そこで、国勢調査のデータを用いて、平成12年から令和2年の松原地区（新今別府）の人口割合の推移をグラフに表した（左図）。赤色は15歳未満、緑色は15歳から64歳、橙色は65歳以上の割合を示している。高齢者と認定される65歳以上の割合について注目してみると、平成12年では21%であったのが、令和2年では36%に増加しており、約15%の差が見られた。このことから、実際に数値でも年々高齢化が進行していることが分かる。加えて、実習における取材を通じた気付きとして、住民間での関わりの減少があげられる。取材をした中だけでもコロナによる祭りの減少やご近所づきあいの低下が見られた。また、老人の方々と若い家庭の居住エリアの違いにより地域の特色や雰囲気やうまく継承されておらず、住むための場所になっているように感じた。解決策としては、町民が積極的に交流するための機会を増やすことがあげられる。